

本年度の静岡県婦人の海外研修団は、昭和六十二年九月二十二日～十月七日の十六日間、アメリカ・カナダを視察・研修をしました。各市町村から選ばれた団員は二十四人。両国でそれぞれ二泊三日のホームステイにより、外国での女性の暮しぶりにふれ、国を超えた心の交流を体験しました。ここに団員の白井清子さん（袋井市）に、その思い出をつづっていただきました。

カナダのホームステイより

北米大陸で一番古い街ケベック。そこを流れるセントローレンス川に沿って、車で三十分程下るとオーガステイン市があります。

その住宅街の中、緑の芝生に燃えるように赤いはずの木が一本たっているレンガ造りの家がステイ先のマルテル家でした。家の中には暖炉が焚かれ、家族の温かい笑顔が長い旅の疲れと異国での不安を吹き飛ばしてくれました。四人家族の御主人のジャンは電話の技術者。フランス語圏であるケベック州にあるこの家で、唯一英語の話せる彼は、私達の為に通訳として大奮闘。いつもやさしく物静かでしたが、一家の柱として大切な事は取りしきり、慣れない私達に本当に気を使ってくださいました。奥様のリーズは見るからにしっかり者で、カナダの多くの婦人がそうであるようにボランティアグループに入っており、



食事のしたくは2人で仲よく

ソーイングの注文を受けてはその収益を寄附するのだと楽しげに語ってくれました。家中には手作りの作品がいっぱいでした。滞在中の食事はすべて彼女の手作りです。私達は本当に感激してしまいました。家中に三つもある大きなフリーザーの中には様々な手製の食品が保存され、毎回の食事がいつの間にか食卓に並べられてしまう秘密がやっとわかりました。友達と時折料理の講習会をしたり、作り方の本を作ったりもするそうです。

二人の子供は共に中学生。姉のミハエルは乗馬の大好きな気どり屋さん。妹のジュリー

自分の時間を大切に、内に外にと充実した日々を送る姿は、女性としての自信に輝いて見えました。



ステイ先のマルテル一家と

は甘えん坊で、すぐ私達と打ちとけ片時も離れませんでした。子供達は実によく家の手伝いやアルバイトに励みます。自分を生かせる趣味を持ち、すでに素晴らしい個性を持った人間として歩み始めている姿はとても頼もしく、親も私も自分を大切にしながら信頼し合う家庭の在り方に、多くのことを学びました。

最後の日、ホテルのロビーで別れの涙にくれるジュリーを抱きしめながら、去りたい思いをいっぱい、私は心からこの子の幸せを願いました。そして真の国際交流は、たとえ言葉は通じなくても、お互いが人間として認め合い、相手の平和を願う心にあるのではないかと思いました。

リタさんの浜松日記

Something about
Filipino Women
by Carmelita Kubota



フィリピンには、上流、中流、下層という三つの社会階級があるというのを、まず強調させていただきます。フィリピンの女性が楽しむことができる娯楽、自由、学問、そして生活様式は、彼女たちがどの階級に属しているかで、決まっています。

およそ15%をしめるフィリピンの上流階級の女性たちは、下層階級の女性たちとは対照的に、たくさんのお楽しみや贅沢を楽しんでいます。彼女たちは、人生の目標を達成し易いような、特定の環境で育てられ教育されます。裕福な親しか通わすことの出来ない特別の学校を卒業し、自分で選んだ有名な会社で、良い仕事を優先的に得ることが出来ます。また、上流社会の名士や有力者として特別扱いされております。

約30%を占める中流階級の女性たちは、弁護士、教師、医者、看護婦、芸術家、作家、そして小さな会社のオーナーなど、さまざまな職業をもっており、それなりの生活をしています。

約55%を占める下層階級の女性たちは、早く結婚するよう促され、高等教育を終えることができません。そのため、良い仕事を得るこ

とはむずかしく、洗濯婦、女中、食堂従業員、売り子、道路掃除婦などを行っています。

このようにフィリピンは、女性が階級によって区別されることのない日本とは、全く異なっているということがおわかりでしょう。

日本では、どの女性も同じような自由や娯楽、学問、生活様式を楽しんでいるように見えます。私は日本に住むようになるずっと以前から、日本女性は良い妻であるという印象をもっていました。日本女性は人に奉仕するという点では一番と言われていますが、私自身が観察しても本当にその通りだと思いません。彼女たちは良い母親で、家事をしながらでもいつも子供の傍にいて、教育のことを気にかけて細かいことから大きなことまでよく面倒をみています。忙しい毎日の中でも尚、創造的な活動に時間をさいています。

私は日本に六年住んでいます。まだ日本女性の特質をつかめていません。けれども、日本女性をとてもしばらしいと思っています。で、私も彼女たちのようになれるよう努力しています。日本の女性たちのすばらしい長所を取り入れるには、長い時間が掛るでしょう。



昨年三月フィリピンを正しく理解してもらおうとフィリピンフェアを開いた

私の妻

一言でいうと陽気でデリケート。物事を楽観的にとらえる反面、深く追求もする。くよくよしない事もあるが、気にするといつまでも続く。料理が好きだ。自分が食べる事が好きだからと思う。夏の暑さは窓を締め切っているが平気だが、冬の寒さは何年経っても慣れない。人には「もう慣れました」と言っているらしい。2人の子供の母親にはみられないのが私もうれしい。6年も外国にいと顔も変わるのか、外人には思われないようだ。国籍は変えるつもりはない。フィリピン人であることはいつもプライドもっている。亭主関白には一生なれそうもない。夫婦共いつも平等の気持ちをくずさないでいる事が、私たちのお守りと信じている。 久保田時治

富士日記(上下)

武田百合子

中央公論社

「これは山の日記です」と、この本は始まる。昭和三十九年、作家武田泰淳は山梨県側の富士山地に山小舎を持ち、東京赤坂のアパートでの日常と、命が洗われるような大自然の中の山小舎と、交互の生活をはじめ。食料や本を積んで、暇をみつけては妻百合子さんの運転する車で山小舎へ向う。

山の日記を書くことを夫人に勧めた泰淳は、はじめ食事の記録だけでもいい、と言ったそうだ。そのせいか毎日毎日、三度の食事の献立が書きつらねてある。朝、味噌汁、ごはん、鯛粕漬。昼、パン、シチュー、サラダ。夜、ごはん、(白菜、ベーコン、竹輪、さつまあげ、ねぎ、豆腐)の鍋。ある時は、湯どうぶの残りにケチャップを入れる(泰淳発案、百合子反対私は食べない)などいうものもある。

他人が何を食べていても関係ない、と言うなかれ、読んでいるう

ちに食事はまさに家庭の基という感がしてくる。買物をしたものの値段もまめに書きつける。例えば昭和四〇年頃、白灯油三五〇円、ビール一打一三二〇円、うどん玉一コー〇円、油揚げ二枚二〇円。百合子さんは、二階が出版社になつていてというような喫茶店、

「ランポオ」に働いていて、泰淳と知り合った。結婚して、いわゆる専業主婦となり、いつさいの家事、雑用、夫の世話、庭仕事、何でもこなす。ギターを弾き、機織りをする。「ミシンを買って夏の洋服は全部自分で縫うんだ」と張り切ってみせる。たくましくて、

優しく、頼もしくて、今や「主婦」への郷愁を誘うほどの主婦の姿をしている。怒ったり、感動したり実に生き生きとおもしろいのだ。作者百合子さんの「オ」は折紙つ

きだが、それだけではなく周りの人々や季節と真摯に向き合つて、「生活をする」という事が実はこんなにもおもしろいことだったのかとやがて気付かされる。そして、日常生活が灰色にしか見えない自分自身の目のくもりを拭つてみようか、という気持になつてくる。

五十一年に泰淳が亡つてから富士日記は本になつたが、作者はその後も文筆で確かな仕事を続けている。

新刊紹介

「ひとり暮らしの老いたく」 十返千鶴子著
まだ若いと思つていたが、ついに白髪が始め、老いじたくの時が来た。街で、車内で老婦人の姿に、何十年後の自分を投影した。私の求める婦人像びつたりの本
海竜社 一、一〇〇円



「アイアム 聖イング」 野田聖子著
女であること、若いということ武器にして、突如政界に進出。軽々と政治しちやう彼女の大胆な発想と行動力は、政治を身近に感じさせ、日本の未来に期待を抱かせてくれる。海越出版社 九八〇円



「女性の心理」 国分康孝・国分久子著
心というのは面倒なもの。自分や他人の、手のつけられない「心」にふりまわされたことはありませんか。その心の動きにはみんな深い「わけ」があるのです。
福村出版 各 一、三〇〇円



「離婚を選んだ女たち」 円より子著
人に与えられた生き方が女性の幸せ!という時代はもう終り。離婚を乗り越え真の幸福と自立を求めて、飛び立った女性達の本音。自分の人生を自分らしく生きるとは?
時事通信社 一、三〇〇円



「女の本がほしい」 尼川洋子編著
自立した生き方を求めて、女性たちが手にする本。その本は質の高いものであつてほしい。そんな願いのもと選ばれた、七一六冊の女性問題ブックガイド。
創元社 一、五〇〇円

◆あとかぎ◆

ね

「心な仕事信望きわめつき」
家度の地位も「不動明王」

お互いの個性がぶつかり合い、
素適な情報誌と楽しい仲間がで
きました。そして今、自分を客観的
に見る目ができ、新しい自分と向
き合っています。
渥美恵美子

つ

「う訳も翻訳理屈おまかせね」
「おっと危ない」縫いぐるみごっけい

何かやらなきゃと焦っていた私
が、この仕事をきっかけにやっと
一歩ふみ出せた気がする。もう後
戻りはできない。前進あるのみ。
佐竹 紀子

と

「んでれら笑いの元凶山椒の実」
「ユニーク古風」気配りの女々

私たち赤い糸で結ばれていたの
ね——満足度100%でこの出来……
仲良し五人の編集員、誰が姉か
妹か……もめるところです。
大高美知代

わ

「ア誰タ」懲りない面々「選んだの」
「お陰で私」ストレス「過食

五人の元気印の編集員の皆さん
取材にご協力くださった皆さま、
心から、あ・り・が・と・う。
いい出会いでした。
不慣れな担当 N・T

あ

「のワタシ」拍休符の「まじめさん」
「素直正直」育ちの良さが

編集員になれて本当にラッキー
気の合う仲間恵まれて、あつと
いう間の一年、これから自分の生
き方を考えてみようと思います。
野村佐栄子

く

「るまひき」旅回りする「ヒロイン」は
「才色兼備のロマンチスト」ね

ネットワークができてみると、
雑誌の広がり大きさに驚いた。
大いに格闘したと思っっている我々
は用意された舞台に乗っただけか
も。
寺田マキ子

おしらせ

一、昭和六十三年度静岡県婦人の
海外研修団員を募集します。
二、この情報誌の「女性編集員」
（五人）を募集します。任期は
六十三年度一年間で、年間十
五回ぐらいの編集会議と取材
が主な仕事です。
●申込み等問合せは、左記婦人
課まで

おわび

本誌十一号P4特別寄稿「身虫
の虫退治」を「身中の虫退治」
と訂正し、おわびいたします。

女性のための情報誌
「ねっとわあく」 12号
昭和63年3月
編集・発行 静岡県生活環境部
婦人課
〒420 静岡市追手町9番6号
☎(0542)21-2137

表紙デザイン
県浜松織維工業試験場
小杉 思 主 世